

医科・歯科連携の実際

第14回

「顔の見える関係づくり」から始める 地域包括医療・ケア活動

岐阜県・国保坂下病院言語聴覚士 安江耕作

はじめに

国保坂下病院（以下、当院）は、岐阜県と長野県の県境に位置しており、中津川市のほか、長野県大桑村や南木曾町からも約3割の患者が訪れる。当院の医療圏は、地図でこそ岐阜県と長野県に分かれているものの、「ずく」（根気、やる気といった意味）という長野県独特の方言がそのまま通用するなど、生活圏はまったく一緒であり、診療圏は約3万人に及ぶ。当院のある中津川市坂下地区は、そんな県境に位置する人口5千人あまりの地域である。しかし、地域の人口は年々漸減傾向にあり、65歳以上の人口が34.7%（平成26年度4月1日現在）を占めるほど、高齢化が進んでいる（図1、写真1）。

当院は昭和23年に、県境の小さな町の国民健康保険組合直営病院として、ベッド数20床で診療を開始した。その後、昭和30年にはベッド数40床の3診療科にて新築移転した。さらに昭和51年にリハビリ施設、昭和52年に人工透析施設、また、平成元年に健康管理センターを併設するなど整備拡充を重ねた後、平成13年6月より199床の病院として現在地に移転した。

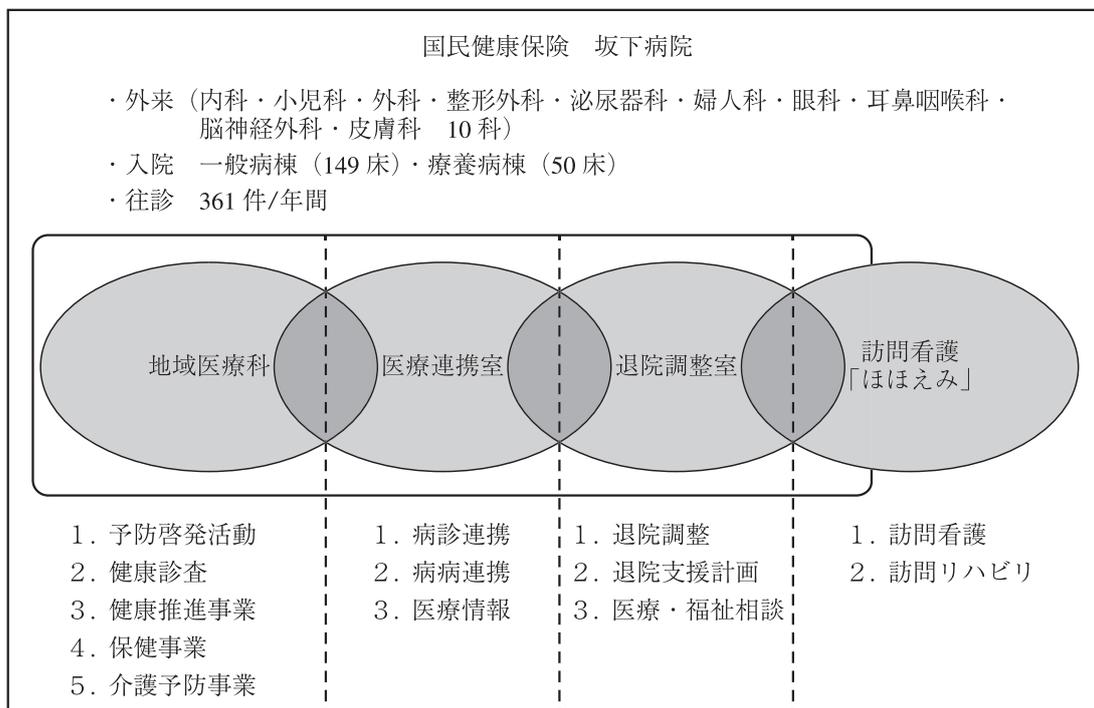
現在は平成17年2月に、長野県山口村を含めた1市7町村の合併により中津川市となったため、中津川市の国保坂下病院として、内科、小児科、外科、整形外

図1 中津川市の位置



写真1 国保坂下病院外観

図2 当院の概要



科、眼科、泌尿器科、婦人科、耳鼻咽喉科、脳神経外科、皮膚科の10診療科を標榜し運営している(図2)。

当院は「地域に愛され、優しく、温もりのある地域包括ケアを実践します」を理念とし、高齢社会において、地域の方々が住み慣れた地域で安心して暮らせるために、医療(キュア)に留まらず、疾病予防のための健康づくり、在宅ケア、リハビリテーション、福祉・介護サービス(ケア)のすべてを包含する生活を視野に入れた全人的医療を展開している。

病院内には地域包括ケアを推進するため、予防活動にあたる地域医療科や退院後の生活を支援する退院調整室などを設置し、行政や地域の医療機関と連携している。さらに訪問看護、訪問リハビリも前述の地域全体にわたって取り組んでいる。つまり、「地域包括ケアを県境を超えて広域的に展開している」のが当院の特徴である(図3)。

ここでは「口腔ケア」を中心に、当院における地域包括医療・ケアの実際を紹介していく。

図3 当院の特長



■ 歯科保健センター

平成15年4月より、当院地域医療科内に歯科保健センターを開設した。歯科医師が不在のため、歯科衛生士1名が開業歯科医院と連携をとり、歯科保健事業を展開している。歯科衛生士の主な業務は、当院入院患者に対する口腔ケア、当院看護師・介護福祉士対象の口腔ケア指導、併設する老人保健施設などへの出張歯科指導、在宅訪問歯科指導、住民対象の歯科健康講座の開催、中津川市歯科検診事業など、多岐に亘っている。また、院内の口腔機能リハビリテーション委員会、

NST委員会にも参加している。

前述したが、当院には歯科医師が在籍していない。そのため、歯科治療が必要な場合には、歯科医師に往診診療を依頼している。患者のかかりつけ歯科医院が近くにある場合は、直接かかりつけ歯科医院に問い合わせてもらいが、かかりつけ歯科医院がない場合は、主治医の指示のもと、歯科衛生士が坂下地区内の歯科医院との仲介を行い、院内での歯科診療につなげる。平成25年度には7件、平成26年度（4月～11月）には8件、歯科衛生士が介入して歯科診療につながった。

■ 栄養サポートチーム (NST)

当院NSTは、内科医師、看護師、薬剤師、栄養士、臨床検査技師、歯科衛生士、言語聴覚士で構成され、週1回の病棟回診と月1回の委員会を行っている。病棟回診では、担当看護師からの情報提供の後に回診を行い、現在の栄養状態を評価、今後の方針をNST担当医師より主治医に提案、助言する。委員会では症例検討会やよりよい栄養摂取方法の検討などを行っている（写真2）。

■ 口腔機能リハビリテーション委員会

口腔機能リハビリテーション委員会は、NST委員会とは別に平成15年4月に開設された。構成メンバーは、内科医師、看護師、介護福祉士、栄養士、臨床検査技師、歯科衛生士、言語聴覚士である。主な活動内容は、歯科衛生士による専門的口腔ケア、口腔ケア備品や実施方法の検討や伝達、嚥下治療食の検討、摂食機能療法の管理などを行っている。

摂食機能療法に関しては、栄養士、歯科衛生士、言語聴覚士で週1回のミーティングと回診を行っており、情報交換と摂食機能療法の実施プログラム、食事形態の検討などを行っている（写真3）。

口腔機能リハビリテーション委員会では、上記の活動以外に、よりよい口腔ケアを提供するための研究も



写真2 NST回診



写真3 口腔機能リハビリテーション回診

行っており、「歯科衛生士の口腔ケア指導を行ったことで口腔内細菌がどう変化するか」「口臭チェッカーを使用したの口腔ケア判定」「歯茎ケアを導入した口腔ケアの検討」などを研究し、院内研究発表会や国保地域医療学会などで報告してきた。実際に効果を実感することで口腔ケアに対する意識を高めることができ、口腔ケアの手技を統一することで、よりよい口腔ケアを提供することができるようになったことを実感している。口腔機能リハビリテーション委員会では、口腔ケアだけではなく、摂食嚥下についてもより専門的に対応できるように検討を進めている。診療放射線技師にも協力してもらい、嚥下造影検査も積極的に進めている（写真4）。

また、各病棟には「口腔ケア備品」の保管場所があり、口腔ケアに使用する歯ブラシや口腔内保湿剤が常



写真4 嚥下造影検査



写真6 口腔機能リハビリテーション委員会



写真5 病棟の口腔ケア備品

備されており、必要性が出たときにすぐにケアできる体制ができている。嚥下練習用のゼリーやとろみ剤なども同様に常備されており、必要と思ったときにすぐに使用できるようになっている。このような備品などの管理も口腔機能リハビリテーション委員会が行っている（写真5）。

前述したように、当院の口腔機能リハビリテーション委員会は、NST委員会とは別に活動している。現在、NST委員会の中に口腔機能リハビリを含めることが多い中、当院では口腔機能リハビリテーションについて十分な情報交換や検討ができるように、あえて別々の委員会として活動している。しかし、当院の平成25年度のNST対象者のうち35%が摂食機能療法の対象者であったことは、栄養サポートと口腔機能、摂食嚥下機能が密接に関係していることを示唆している。そのた

め、両委員会の情報伝達がスムーズにできるように、委員長である担当医師を含め、重複するメンバーを多くすることで対応し、より手厚い検討ができている（写真6）。

いきいきネットワーク研究会

いきいきネットワーク研究会は、当院を中心に中津川市と長野県木曾南部の介護施設、社会福祉協議会で定期的に行われている。高山哲夫院長の「地域包括ケアにおいて大事なことは、お互いに顔の見える関係づくりである」との理念のもと、同じ地域で同じ視点で、同じレベルのサービスが提供できるようにと始まった。地域包括医療・ケアに関連する保健、医療、介護、福祉のさまざまなテーマで研修会が行われてきたが、その中に「摂食嚥下・口腔ケア」というテーマが何度も取り上げられてきた。口腔機能に対する意識の高さを実感するとともに、それに伴い地域全体でのレベルが上がってきていることを実感している（写真7）。

「糖尿病教室」から「ふれあい健康塾」に

当院では、地域住民を対象とした「糖尿病教室」を継続している。内容は糖尿病の基礎知識について、栄養士による栄養指導、薬剤師による服薬指導、理学療法士による運動教室、口腔ケアについてなどである。



写真7 いきいきネットワーク研修会



写真9 介護施設での摂食・嚥下指導



写真8 糖尿病教室

しかし、糖尿病教室での食事療法や運動療法などは糖尿病に限るものではないため、平成27年より糖尿病教室を「ふれあい健康塾」として再スタートすることとなった。医療従事者に対してではなく、地域住民に対して口腔ケアの重要性を伝えていくよい機会になるのではないかと期待している（写真8）。

■ 地域に向けた医療活動

当院では、院内の医療だけでなく、地域への啓発活動も積極的に行っており、講演や教室は年に30回以上開催している。高山院長はスタッフに「外に出

ていく医療が大事」と呼び掛けている。口腔機能リハビリテーション委員会も地域に出向く活動に力を入れており、歯科衛生士は坂下老人保健施設や中津川市の歯科保健事業に、言語聴覚士は坂下老人保健施設や特別養護老人ホームに出向して、口腔機能リハビリテーションを行っている（写真9）。さらに、福祉ライフ科を設置している地元高校の講義の一環として、口腔ケア、摂食嚥下部門を担当し、指導している。

また、高山院長は住民の関心を引くように、糖尿病の怖さや予防を伝える人形劇「あなどるな！糖尿病」を創作。医師、看護師ら病院スタッフがボランティアで人形劇を演じ、撮影した映像をDVDに収録して病院内外やインターネット上で流している。「うつ」「認知症」「肥満」「禁煙」「がん予防」をテーマにした人形劇も順に制作された。

■ おわりに

地域包括医療・ケアとは、保健、医療、介護、福祉が一体となって地域住民に貢献しようとするものである。「顔の見える関係づくり」を当院から発信し続けられるように、これからも院内だけで留まらない、地域に向けた医療を展開していきたいと考える。